

小学校第3学年 道徳 学習指導案

期 日 平成29年2月17日（金）第2校時
場 所 山鹿市立山鹿小学校 3年3組教室
指導者 教諭 古閑 彩香

1 主題名

「感謝の心」 C 感謝

2 教材名

「道しるべ」（道徳教育用郷土資料「くまもとの心」小学校3・4年 熊本県教育委員会）

3 主題について

(1) ねらいとする内容項目（価値）について

本主題は、自分の日々の生活は多くの人々の支えがあることを考え、広く人々に尊敬と感謝の念を持つことに関する内容項目である。中学年での「家族など生活を支えてくれている人々や現在の生活を築いてくれた高齢者に、尊敬と感謝の気持ちをもって接すること」という学びが、高学年の「日々の生活が家族や過去からの多くの人々の支え合いや助け合いで成り立っていることに感謝し、それに応えること」へと発展していくこととなる。

私たちは、様々な人に支えられ、助けられながら生きている。人々に支えられ助けられて自分の生活が成り立っているということを知ること、周りの人に対して、尊敬と感謝の気持ちが生まれてくる。それは、日々の生活、あるいは自分が存在することに対する感謝へと広がり、生命尊重や人間尊重の精神を支えるものにもなる。また、相手に対する尊敬と感謝の気持ちを持って、互いに認め合っていくことは、よりよい人間関係を築くためにも不可欠である。

日頃、子どもたちがお世話になっている人はたくさんいる。今、自分が幸せに過ごしているのは、多くの人々の支えと恩恵を受けているからであるが、そのことにはなかなか気付きにくい。子どもたちに、日々の生活を支えてくれている人の存在に気付かせ、その行動の意義やその人の願いなどを理解させることにより、尊敬と感謝の心情を育てたいと考え、本主題を設定した。

(2) 児童の実態について

本学級は30名。1月に実施した道徳の時間に関する意識調査の結果は、以下の通りである。

（4件法により調査：4 とてもそう思う、3 そう思う、2 あまり思わない、1 思わない）

番号	質 問 項 目	平均値
1	道徳の時間に、自分にとって大切なことが分かる。	3.24
2	道徳の時間に、今まであったことを思い出して、その時の自分と比べながら考えている。	2.86
3	道徳の時間に、これからの自分はこうしていきたいと考えている。	3.28
4	道徳の時間に、自分の思うことを発言できている。	3.10
5	話合いで、友だちの考えと自分の考えを比べながら聞いている。	3.17
6	話合いで、友だちの考えと自分の考えを比べて聞いた後、はっとしたり、なるほどと思ったりするところがある。	2.90
7	話合いで、自分の考えと同じだなと思ったり、自分の考えが変わったりする。	3.17
8	道徳の時間に、ペアでする話合いが好きである。	2.59
9	道徳の時間に、ペアでする話合いは、自分が考えるために役に立つと思う。	3.20
10	道徳の時間に、グループで話し合ったり活動したりすることが好きである。	3.10
11	グループで話し合うことで、自分の考えがより深まることがある。	3.17
12	これまでに自分がどうすればよいかを迷ったとき、道徳の時間に考えたことや話し合ったことを思い出さることがある。	3.10

（N=30人）

意識調査の結果、道徳の時間に「自分にとって大切なことが分かる。」や「これからの自分はこうしていきたいと考えている。」と考えている児童が多いことから、道徳的価値についての理解を基に、自己の生き方について考えを深めていることが窺える。また、話合いで「友達の考えと自分の考えを比べながら聞いている。」、あるいは「自分の考えと同じだなと思ったり、自分の考えが変わったりする。」という

項目の数値の高さから、自己の生き方について考えを深める際に、友達の意見が大きく影響していることが考えられる。

反面、道徳の時間に「今まであったことを思い出して、その時の自分と比べながら考えている。」や「友だちの考えと自分の考えを比べて聞いた後、はっとしたり、なるほどと思ったりするところがある。」といった項目に対する受け止めがやや弱く、「自己を見つめる」や「物事を多面的・多角的に考える」という学習には至っていない児童も見受けられる。

学習形態としては、ペアで話し合うよりも少人数のグループで話し合うことを好む傾向にある。

ねらいとする価値に対して、意識調査を実施したところ、以下のような傾向が見られた。

	いる	いない
あなたは今、「ありがとう」を伝えたい人はいますか。	29 人	1 人

誰に「ありがとう」を伝えたいですか。 ※自由記述（複数回答可）
母（12 人） 父（10 人） 友達（9 人） 祖母（4 人） 家族（3 人） 先生、兄弟姉妹（2 人） 祖父、看護師（1 名）

第1学年及び第2学年での学習の成果から、ほとんどの児童が家族などの身近な人たちに対して、「遊んでくれる」や「ご飯を作ってくれたり、洗濯をしてくれたりする」、「欲しいものを買ってくれる」といった「感謝」の気持ちを持って生活していることが分かった。

3年生では、社会科「働く人とわたしたちの暮らし」や総合的な学習の時間等での学習活動を通して、自分たちの生活を守り、支えている地域の人たちの存在について触れてきている。しかし、児童の意識調査では、「感謝」の対象は、自分と接する時間が長く、直接的な影響力の大きい身近な家族や友達が中心であることが分かる。

第3学年という発達段階及び内容項目を考えると、自分の生活を支えてくれている多くの人々の思いを考え、その人たちの存在意義に対する理解を深めながら、「感謝」の対象を広げていくことが必要であると考ええる。

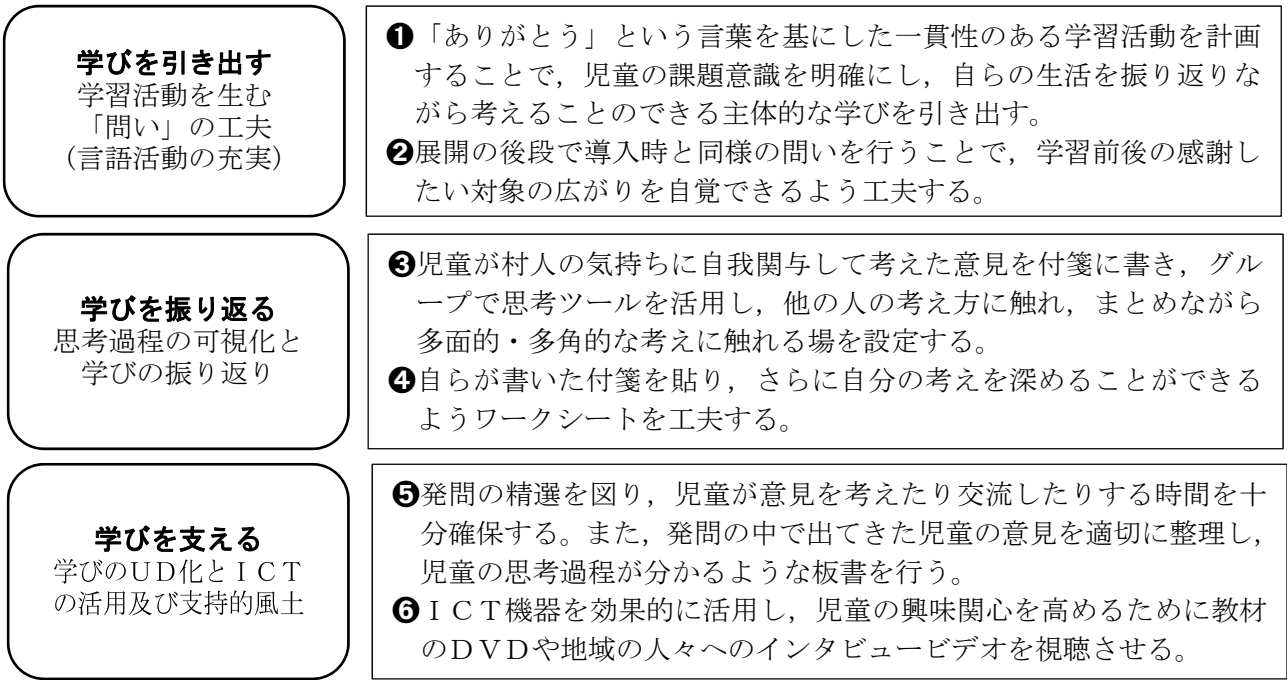
(3) 教材について

本教材は、石工職という家業と村の要職のかたわら、阿蘇の道沿いに50年で1824個の道しるべを作り続けた甲斐有雄の生涯を描いたものである。石を彫り、道しるべを作るという苦勞の多い作業を支えたものは、当時、厳しい阿蘇山中の自然を旅した人々や共に暮らす村人の幸せとひとときの安らぎを願った有雄の気持ちであった。

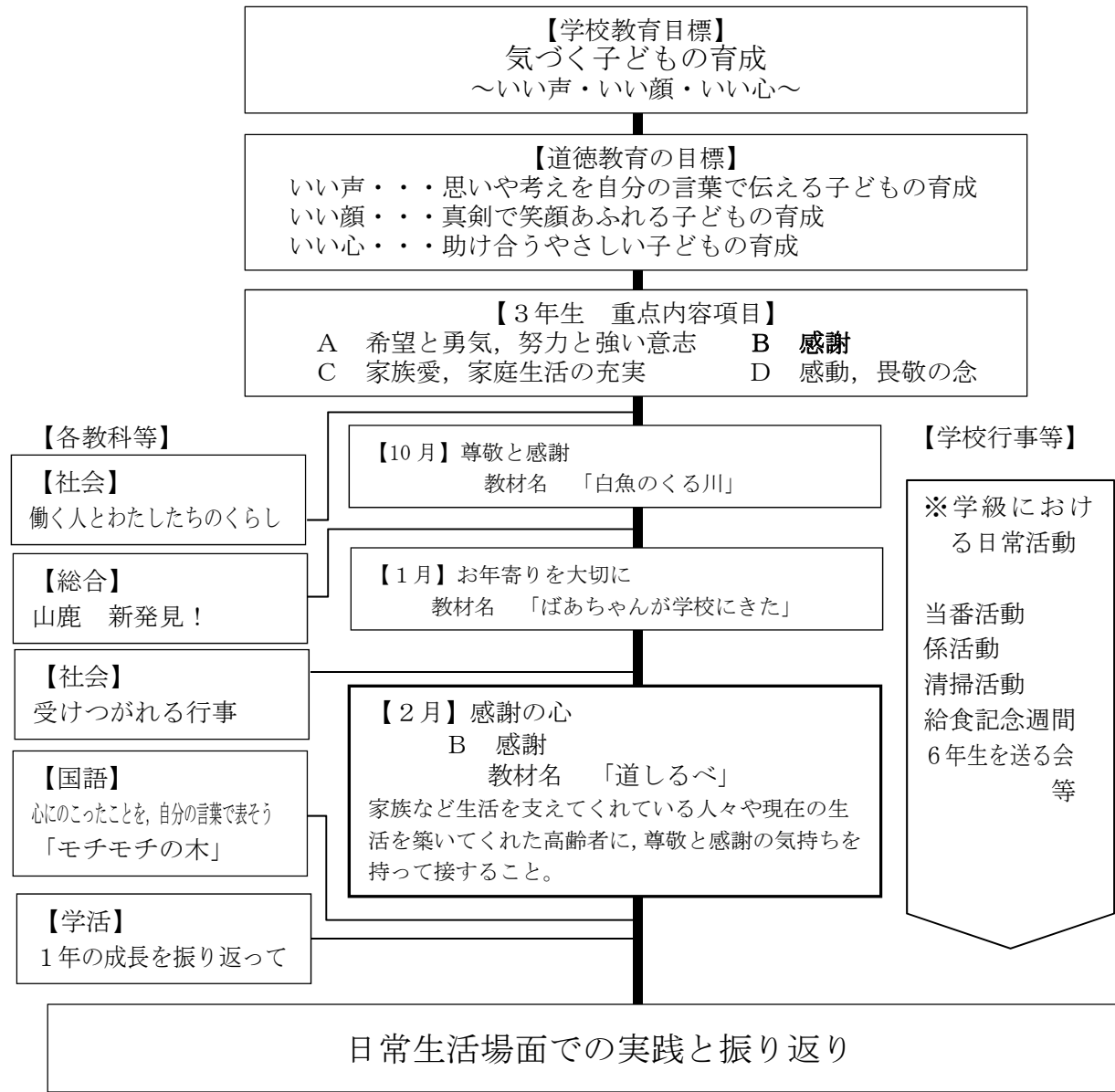
本資料は、そのような有雄の業績や気持ちを理解させるとともに、有雄に対する人々の感謝の気持ちに気付かせることによって、公共のために自らの苦勞や損得をいとわずに尽力してきた人々に対する尊敬や感謝の念を育てるのに適した教材である。

(4) 指導にあたって

- 教材の提示に際しては、児童がより甲斐有雄や村の人たちの気持ちに迫ることができるよう、テレビ番組で放送された「熊本的心」広報テレビを活用する。また、教材を一度視聴しただけでは感じ取ることが難しい道しるべづくりの大変さについては、適宜教師が補足説明を行うことで、児童の登場人物への自我関与を深める一助とする。
- 付箋に村人の感謝の気持ちを想起して書く際は、児童が感謝の理由に焦点を当てて考えることができるよう、書く部分を絞り込んだ付箋を用意し、一人に複数枚配付する。
- 発問を構成するに当たっては、人々のために道しるべを作った甲斐有雄と、その甲斐有雄の行いに感謝の気持ちを表す村の人たちの双方の心情を考えることで、尊敬と感謝の気持ちを持って、互いに認め合っていくという日常の人間関係づくりにもつなげていきたい。
- 児童がねらいとする価値に基づいて自らの生活場面を振り返ることができるよう、学校のため、あるいは地域のために活動しておられる方々のインタビュービデオを作成し、視聴させる。
- 本時の学習後、3月の学級活動「1年間の成長を振り返って」の中で、感謝の気持ちを伝える相手や伝える方法について話し合い活動を計画し、日常生活場面での実践につなげていく。



4 各教育活動との関連



5 本時の展開

(1) 本時のねらい

甲斐有雄が道しるべを立てたことに対して、記念碑を作りたいと考えた村の人々の思いを考える活動を通して、生活を支えてくれている人々や現在の生活を築いてくれた高齢者に感謝の気持ちをもって接しようとする態度を養う。

(2) 展開

過程	学習活動	主な発問と児童の反応	指導上の留意点及び評価	備考
導入 5分	1 今、感謝の気持ちを伝えたい人とその理由について考える。	T：今、あなたが「ありがとう」を伝えたい人は、誰ですか。 また、なぜそう思うのですか。 C：お母さん。育ててくれているから。 C：家族。いつも大切にしてくれているから。 T：「ありがとう」とは、いい言葉ですね。今日は、「ありがとう」を伝えたい人について考えてみましょう。	○事前のアンケート結果に基づき、1つの視点に集中しないよう、意図的な指名を行う。また、児童の意見をグループ分けして板書し、感謝の対象を明確にする。 ○児童の意見を共感的に受け止めるとともに、本時の授業を通して、その対象を増やしていくという本時の方向性を示すことで、道徳的価値に根ざした発問へとつなげる。	フラッシュカード
展開 35分	あなたが「ありがとう」の言葉を伝えたい人は、だれですか？			
	2 教材「道しるべ」を視聴し、話し合う。 (1) 甲斐有雄が道しるべを作り続けた理由を考える。	T：有雄さんは、どんな気持ちで50年もの間、道しるべを作り続けたのでしょうか。 C：道に迷う人がいないように。 C：道に迷って、命を落とす人がいないように。 C：旅人の疲れが取れるように。	○教材はDVDを視聴させながら提示する。 ○石で道しるべを作る大変さや仕事とは別に作成していたという背景についても補足説明することで、甲斐有雄の山道を通る人々に対する気持ちに迫らせる。 ○道しるべに自分の作った歌を刻んだ理由についても考えさせる。	大型テレビ DVD 挿絵
	(2) 村の人々が記念碑に込めた思いについて話し合う。	T：記念碑には、それを建てた人たちの「ありがとう」の気持ちがつまっています。この記念碑には、村の人たちのどんな「ありがとう」がつまんでいるでしょう。 ・みんなを安心させてくれてありがとう。 ・みんなの命を守ってくれてありがとう。 ・みんなを楽しませてくれてありがとう。 ・みんなの疲れを取ってくれてありがとう。	○個人でフリーカード（付箋）に考えを複数枚書いた後、グループでの話し合いの場を設定し、多様な意見を交流させる。 ○フリーカードには、感謝の理由が短く、また明確になるよう工夫する。 ○2～3グループから話し合った内容について紹介させ、他のグループからは紹介されなかった意見を求め、板書する。	付箋 ホワイトボード
	3 身近な人たちで感謝の気持ちを伝えられる人の存在について見つめ直す。	T：こういう人は、あなたの近くにいませんか。 C：交通指導をしてくれている人は、私たちの命を守ってくれている。 C：私たちを見守ってくれている地域の人たちがいるから、安心して生活できている。	○児童から出された意見に基づき、同様の理由から児童の身近にいる様々な人たちについて考えさせる。 ○地域で児童を見守ってくれている様々な職種の方々に取材したインタビュービデオを視聴させることで、多面的・多角的に考える一助とする。	インタビュービデオ
まとめ 5分	4 感謝の気持ちを伝えたい人について考えを深める。	T：今日の学習を通して、あなたが「ありがとう」を伝えたい人には、どんな人がいますか。	【評価】（ワークシート） 自分たちの生活を支えてくれている人たちの存在に気付き、感謝の気持ちを持って接していこうとする意欲をもてたか。	ワークシート
	5 教師の説話を聞く。	T：先生も、今「ありがとう」を伝えたい人がいます。	○児童にない視点から感謝したい人を紹介することで、さらに身近な人たちの存在に関心を持たせる。	

【板書計画】

「ありがとう」

「ありがとう」
を伝えたい人

お母さん
お父さん
家ぞく
友だち

+

道しるべ

かいありお
甲斐有雄



・高森町の農家に生まれた。
・農家をしながら石工としても働いた。
・阿蘇の道ぞいに五十年間、道しるべを作り続けた。



50年間で
1824個



村の人たちが記念碑にこめた思い



安心させて
くれる

命を守って
くれる

楽しませて
くれる

つかれを
とってくれる



せの高い草がしげる道



13

道しるべ

広いすすきの原を歩いてきた旅人が足を止めました。わかれ道のところに、カッチン、カッチンと一心に石をきざんでいる人がいます。

「あ、あなたですか。あちこちに道しるべを立ててくださっているという方は。」

と、旅人がたずねますと、

「道にまよう人がいないようにと思ってやっています。が、仕事の合間のことで、なかなかはかどりません。」と、答えたのは、甲斐有雄という人でした。

有雄は、今からおよそ百八十年前、熊本県の東の阿蘇郡野尻村（今の高森町）に生まれました。

そのころの野尻は、旅人の行き来も多くて栄えた村でした。周りの野原は広々として、村々をつなぐ道がいくつも通っていました。

しかし、その細い道には、道しるべがありません。

その上、夏は先が見えないほど、せの高い草がしげります。冬は雪が積もって、畑の道も分からなくなります。それで、旅になれた人さえも道にまよってしまふのでした。一度道にまよったら、すぐに助けてもらふことはできずに、行きだおれになってしまふ人もありました。

野尻で育った有雄は、うでのよい石工になりました。石をきざむ仕事をしながら、こう思いました。

（そうだ、この石工のうでで野原に道を知らせるための石を立てよう。雨がふっても、風がふいても、いつまでも残る石の道しるべを立てるのだ。そうすると、道にまよう人が助かるぞ。）

有雄は、大きな石を大野川の谷底でさがしました。それを一つ一つ牛に引かせて運びました。

その石に、「右 たかもり 左 のじり」などと書いて、心をこめて一字一字をほります。

甲斐有雄は、阿蘇の高森町の農家に生まれた。まじめに働き、周りの人から信用されて好かれていた。成長すると、農業をしながら、住んでいる町のまじめ役も数多く引き受けて活やくした。また、石をささむ仕事をすると、石工としてもがんばって働いた。そして、三十二歳のころから五十年間、旅をする人が山の中で道が分からなくならないように、石の道しるべを作り続けた。また、作った数や置いた場所を、きちんと記録に残している。そこには、道しるべを立てる時に、近くに住んでいる人がみんな集まって、石を運ぶ手伝いをしたことが書かれている。



道しるべ

雨風で古くなっているけど、その石は、道ばたのあちこちに見ることができます。
野尻村の中ほどには、有雄がなくなる前の年に村の人が立てた有雄の記念碑が残っています。

一つ二つと、有雄がきざんだ道しるべは、村の四つかどや、まよいやすいようなわかれ道に立てられていきました。道を通る人は、その道しるべを見てどんなにほっとしたことでしょう。
有雄がきざんだ道しるべは、野尻村だけでなく、近くの村や町にも、また、宮崎県や大分県にも次々に立てられました。とうとう、その数は、千八百二十四にもなりました。
有雄は、ふだんは家の仕事にはげんで、村の世話役もつとめました。また、おもしろい話をしたり、歌を作ったりすることが好きでしたから、道しるべに自分が作った歌をきざむこともありました。おもしろい歌の言葉は、道行く人をなぐさめてくれました。
たくさんさんの人の命を守り続けた有雄の道しるべが作られてから、およそ百年以上がたちました。

